

B02-58・計画研究

中世における外国文化の受容と展開

研究代表者 木田 章義
京都大学大学院文学研究科 教授

研究分担者 丸山 徹
南山大学人文学部 教授

鈴木 広光
九州大学文学部 講師

李 長波
京都大学大学院人間環境学研究科 助手

中世における外国文化の影響の中、特に目立つのは宗教を通じての影響である。禅宗を通じて流入してきた中国文化は、五山文化と呼ばれる文化を興隆させ、政治にも経済にも大きな影響を与えた。また、五山文化は、室町時代から江戸時代以降の、極めて広範囲の知識人を育てる温床となった。五山文化の特徴などの全貌を明らかにすることは、日本文化の基盤を理解して行く上で、きわめて重要な問題である。

一方、キリスト教は、布教の過程の中で、多くの日本研究書と大量の報告書を残した。このキリシタン達の残した日本に関する文献は世界各地に残存しており、それらの文献学的な調査もまだ十分とは言えない。特に、日本語に翻訳された各種宗教書の原典を明らかにすることは、たいへん面倒な作業となるが、解決しておかなければならない問題である。

そのほか、朝鮮半島からも活字印刷や多くの朝鮮書籍が伝えられ、中国でも日本研究が盛んになり、日本に関する記録や日本語が文献に書きとどめられている。

このように中世は、非常に広範囲の文化接触を起していた時代であり、外国の宗教を受容し、消化してゆく過程を探ることによって、日本人とは何か、日本文化とは何かを明らかにする。そのために、国内文献や中国文献・朝鮮文献を比較することによって、まず、それぞれの共通点と相違点を明らかにしてゆく。また、キリスト教については、日本布教と東アジア布教の方法の比較によって、日本人、日本文化の特色を明らかにすることができるであろう。

中国文化の受容に関しては、禅宗の受け入れ方を考察する。特に『碧巖録』の日本の注釈書の目録を完成させることと、その書誌学的研究を行い、各注釈書の影響関係を明らかにする。一方で、朝鮮半島における

禅宗関係の書籍の目録を作成し、朝鮮半島では、禅宗をどのように受容し、どのように変容させているかを明らかにし、日本での受け入れ方との対比を行い、日本的特質というものを抽出してゆく。

キリシタン資料については、バレット写本の注釈作業を継続する(これが完成するためには少なくとも5～6年はかかると思われる)。また、原典の特定のための調査も継続する。同時に、東アジア、特にインドにおけるキリスト教布教の方法論も、本年の重要な研究対象となる。コンカニ語に翻訳された教義書もあり、それを分析することによって、インドにおける布教法や教義の翻訳法などを明らかにしてゆくことができる。当時の日本には高度な文化・文明があったため、他の地域とは異なった方法をもとっているようだが、それらと比較することによって、日本文化・文明の特質が明らかになってゆくであろう。これらのキリシタン関係の研究のために、もっとも基本的な正書法の問題なども、視野に入れている。

日本語の方面では、これまでにかなり進んでいる禅経典の受容の研究から、中国語口語語彙を選び出す作業を主として行う予定である。この調査は江戸時代中期の中国小説を翻案した物語中の口語語彙の調査まで時代を下げる必要がある。

B02-59・計画研究

キリシタン文献の文化横断的研究

研究代表者 米井 力也
大阪外国語大学外国語学部 教授

研究分担者 エンゲルベルト・ヨリッセン
京都大学総合人間学部 助教授

キリシタン文献には、日本文化がはじめて西洋文化と接触したときに生じた軋轢や融合の様相がはっきりと刻印されている。その点で、聖書や聖人伝に代表される西洋の古典の日本における伝承と受容の典型と考えられる。しかし、キリシタン文献の分析のためにはラテン語・ポルトガル語・スペイン語等で記された原典との対照が不可欠であるため、研究があまり進んでいないのが現状である。

本研究では、日本における西洋の古典の伝承と受容の一環としてのキリシタン文献を、言語・文化・歴史の横断的な視座から総合的に分析することを主眼とす

る。キリシタン文献ならびにその原典の収集と対照、ヨーロッパ人宣教師や日本人キリシタンが直面した異文化間の軋轢等の実証的分析、大航海時代のヨーロッパと日本の歴史的な位置、江戸幕府の迫害によって潜伏せざるを得なかったキリシタンによるキリシタン文献の変容など多角的に研究する。また、同時に、従来一部の研究者しか触れることのできなかったキリシタン文献をデータベース化することによって、研究を深めるための基礎とする。

研究代表者は、聖書やキリスト教教理書『どちりなきりしたん』がアジア各国でどのように受容されたのかという問題について、翻訳原典との比較対照を通じて、言語にあらわれた軋轢や融合の様相を分析すると同時に、江戸時代におけるキリシタン文献の変容について、潜伏キリシタンによって記された文献の分析をおこなう。

研究分担者は、ポルトガル-インド-マカオ-日本と連なるイエズス会の活動とスペイン-メキシコ-フィリピン-日本と連なるドミニコ会・フランシスコ会等托鉢修道会の活動の比較対照を通して、ヨーロッパ人宣教師や日本人キリシタンが直面した異文化間の軋轢、大航海時代のヨーロッパと日本の歴史的な位置にかんする実証的分析をおこなう。

B02-60・公募研究

正倉院聖語蔵経巻の文献学的研究

隋・唐経を中心に

研究代表者 末木 文美士
東京大学大学院人文社会系研究科 教授

研究分担者 月本 雅幸
東京大学大学院人文社会系研究科 助教授
杉本 一樹
宮内庁正倉院事務所保存課 調査室長

研究目的

正倉院聖語蔵の仏教経典は783点4960巻にのぼり、その中心をなすのは天平12年の光明皇后発願五月一日経、及び神護景雲経である。また、中国から請来された隋・唐経の類も少なくない。これらは長い間、東大寺の尊勝院に所蔵されていたが、明治維新のときに皇室に献納され、正倉院に蔵されることになったものである。それらは、敦煌本と並ぶ古い写本であり、きわ

めて価値高いものであるが、従来ほとんど研究されてこなかった。その理由は、正倉院御物として保存を重視し、一般の研究者に対して非公開であったからである。この度それがCD Rによって刊行され、公開されたため、初めて一般の研究者による研究が可能となった。現在のところ、第1期として中国から請来された隋・唐経38点243巻が刊行され、近く第2期の五月一日経の一部も刊行予定である。これによって初めて一般の研究者による研究が可能となった。同類のものとして、敦煌本の研究はすでに世界的に盛んであるが、聖語蔵本はほぼ同時代で、多くは敦煌本以上に保存もよく、貴重なものである。したがって、本研究の成果は、世界的に仏教写本の研究に大きく資することとなる。本研究はその先鞭をつけようとするものであり、従来未開拓の領域を開くものとなる。その際、このような古代の貴重資料の研究に当たっては、一分野からの研究だけでは非常に偏った面しか見ることができないため、研究分担者はじめ、他の分野の専門家にも意見を徴し、できるだけ学際的な視点から研究を進めたい。

研究計画・方法

研究協力者として、月本雅幸氏（東京大学大学院人文社会系研究科・助教授、国語学）、杉本正樹氏（宮内庁正倉院事務所保存課・調査室長、日本史学）に加わっていただき、総合的な研究を目指す。即ち、末木は仏教学的な見地から、月本は国語学的な見地から、杉本は歴史学的な見地から研究を進める。その研究は主として2つの点から行なう。〔1〕聖語蔵経そのものの研究。これはまた、研究代表者と分担者3名により、3つの方面から研究する。末木は、仏教学的見地から研究を進める。聖語蔵経典はすでに多く大正新脩大蔵経の校勘に使用されているが、従来その校訂がどの程度正しいのか、確認できなかった。そこで、大正蔵と対照して確認し、もし誤りがあれば、それを正す必要がある。また、大正蔵の校訂には、写本の修正や写本に加筆された注記の類は無視されているが、そこには、写本の由来や伝来を知る上で重要なものや、どのような教学の見地から読まれてきたかなど、検討すべき問題が多い。月本は、国語学的見地から研究を進める。聖語蔵本に白・墨・朱などで加点されたものは、古い時代の国語資料としてきわめて貴重である。まず、それがどのような僧によって、どのような見地で書かれたか検討が必要である。さらに、古代語の語法などで顕著な新発見も期待されるので、その観点から検討を加える。杉本は、歴史学的見地から研究を進める。最近歴史学的分野からは正倉院文書の研究が著しく進

んでおり、その方面と連関させることにより、聖語蔵経巻の書写や伝来について、新たな知見が得られるであろう。〔2〕このような聖語蔵の研究は、他の中国の敦煌写経、房山石経、印刷大蔵経、あるいは日本の平安時代の大蔵経、その他の写経類と対比することが必要である。また、国語史的観点、歴史学的観点からも奈良・平安期の多数の写本類と対比研究することが不可欠である。それによって、聖語蔵本の特徴をより明らかにするとともに、古代における漢文仏典の流布・展開に関する新しい知見が開かれるであろう。

B02-61・公募研究

古代幼学書の基礎的研究

研究代表者 黒田 彰
佛敎大学文学部 教授

研究分担者 三木 雅弘
梅花女子大学文学部 教授

古代幼学とは、七・八歳から十歳前後の子供を対象とした、古代から中世にかけて行われていた初等教育の体系を指すが、その教育の場では日中両国で作成された様々な書物（幼学書）が用いられていた。この研究では、古代の幼学書の中でも日中両国において、文学・思想など幅広い文化面において大きな影響を及ぼしたと考えられる「孝子伝」について、初めての本格的な研究を実施し、日中両国における文化史的意義を明らかにしていく。具体的には、日本に伝存する二種の完本テキストの翻刻、本文校勘、注解を行うとともに、「孝子伝」と関連を有する日中両国の数多くの文献資料および図像資料との対照を試みる。さらにその成果を踏まえて、日本の古代から中世に至る文学史、文化史に占める幼学としての「孝子伝」の意義を、日中両国の「孝」思想の成立、変遷に留意しつつ解明してみたい。

古代幼学的重要性については、かつて太田晶二郎氏が、「幼学の書は、程度は低いものであるけれども、根底的な影響を広範囲に及ぼす。高尚なる文芸・思想等に至っても、その史的考察に、当時の幼学書が何であったかを知って、これを考慮に入れる必要がある」と述べられている。すなわち古代幼学を、過去の時代において文化の底辺を形成していた重要な分野と位置づけられたわけであるが、それ以降も古代幼学は文学研

究、歴史研究の狭間にあつて、いずれの分野の研究者からも等閑視されており、幼学書についても、必要に応じて部分的に利用されることはあつても、書物そのものが研究の対象に据えられ、正面から取り上げられることはほとんどなかったといつてよい。

今回の「孝子伝」の研究にあつても、研究担当者の所属する「幼学の会」における共同研究でテキスト読解を準備してきたが、この「孝子伝」は日本のみならず、中国においても、文学、思想、絵画・石刻等の芸術面にまで、幅広い関連分野を有している。今回の研究により、広範囲かつ多数の日中両国の文献資料・図像資料との対照研究が可能となり、これまで訓読・注釈は言うに及ばず、翻刻さえも容易に利用できなかった「孝子伝」について、これらの多くの資料との関連を探ることによって、正確な解読本文や充実した注解の提供が可能となる。さらに「孝子伝」の成立や、その日中両国における受容を明らかにしていく過程で、日中における「孝」の思想の確立や一般民衆への普及、日中の「孝」思想の変遷の比較など、日中両国の文学史、思想史、文化史、また日中比較文学史、文化史においても重要な数々のテーマが提示され、それぞれの専門分野からのアプローチにより、従来の伝統的な文学研究、歴史学研究ではなし得なかった斬新な成果が幾つももたらされるであろう。

研究の基本的な方針としては、日本に残存する二種の「孝子伝」（船橋本 京都大学蔵、陽明文庫本）の本文解読、研究作業を行い、図像資料との対照を通じ、二種の孝子伝の総合的な注解を完成させ、その日中における文化史的意義を多方面から検討する。

また、中国において、既に漢代に起源を見る「孝子伝」は、日中両国に多くの逸文、図像資料を残す。殊に図像資料は、中国において博物館、美術館等に蔵されて従来から知られているものの他に、近時、各地において新たに出版される美術全集や出土資料報告等により、続々と新出の資料が得られ、また、今世紀の前後に、西欧、アメリカに渡ったものも数多い。これら海外に伝存する資料の調査蒐集にも全員が積極的に当たることとする。

古代幼学という分野は、過去の日本や中国において、人々がどのような方法で、またどのような形で世界を認識していたのかという、文化形成の根本を探る重要な研究課題であるにもかかわらず、内容が初学者向けで、またきわめて広範囲に渡るために、中国においても日本においても、文学研究、歴史学研究、思想史研究のいずれの分野からも本格的な研究対象とは見なされず、必要に応じてその一部が参照され、利用される

にとどまっていた。これに対して、この研究では、「孝子伝」という幼学書を正面から研究対象に取り上げ、その日中両国における文化的な位置づけを幅広く詳細に検討することにより、古代幼学が、日中両国の幅広い階層の人々の文化的基盤を支えていた重要な分野であることが明らかにされるであろう。また、この研究成果が上記の文学、歴史、思想等の各研究分野にフィードバックされれば、幼学という新たな視点により、これまで見落とされていた事実があらためて認識されていき、文化の基盤・底辺を視野に据えた文化史的により確度の高い研究が展開されていくものと思われる。

B02-62・公募研究

日本における唐律令・礼の継受と展開

研究代表者 大津 透
東京大学大学院人文社会系研究科 助教授

研究目的

本研究は、日本の古典文化の特質を探るため、日本古代の国制の枠組みである律令制の性格を解明することを目的とする。

律令制は、中国・唐の法典を輸入した継受法であるが、唐法をかなり変更しており、唐制との比較研究から、日本固有の土俗的・民族的なあり方を掴みだしたい。一方で礼を含めて中国国制の継受は8・9世紀を通じて続き、10世紀以降の撰関時代が、中国文化の強い影響の下で成立した古典古代であったことを解明したい。広く日唐の律令法の比較研究を行うが、研究の遅れている以下の2点に重点を置く。

- (1) 龍谷大学所蔵のトゥルフアン将来大谷文書、およびソウルや中国にあるトゥルフアン文書を調査研究し、特に土地制度関係の膨大な帳簿類の復原を行い、唐西州における律令制の実態を解明し、日本の地方行政や土地制度との相違を考え、日本律令制の特質を明らかにする。
- (2) 中国国制の一部をなす礼は、律令法導入時の日本においては継受されず、8世紀半ばから9世紀にかけて受容される。この礼の継受という視点から、宮廷儀礼を捉え直し、9 - 10世紀に作られた儀式書について内容分析を行い、平安時代の儀式や格式法を唐制継受の側面から再評価する。

研究計画・方法

研究経費としての旅費を得て、昨年に続いて、龍谷大学大谷文書の土地制度関係文書を中心に、調査、復原研究を精力的に行い、大谷文書の全体像を解明し、あわせてソウルの国立中央博物館が所蔵するアンペラに貼られた文書について、筆者が復原した儀鳳三年度支奏抄に続くと考えられるので、ソウルに赴いて調査を行い、唐代の国家財政についてさらなる新事実を解明したい。この復原作業は、膨大な文書数となるので、謝金を支出して野尻忠氏・稲田奈津子氏の大学院生に作業してもらい、研究を進展させこれまでえられた成果を一層完全なものにしたい。

また唐代の制度を考えるため、寧波の天一閣において宋天聖令の写本を調査し、賦役令・喪葬令・倉庫令などの唐開元25年令の復原研究をすすめ、日本令の意味を明らかにして、国際学会に参加して日唐の文化交流と大谷文書の復原について発言したい。

B02-63・公募研究

古代・中世の漢文訓読文資料の文体史的研究

研究代表者 金水 敏
大阪大学大学院文学研究科 教授

研究分担者 朝倉 尚
広島大学総合科学部 教授

1 目的

漢文訓読文体は、日本における中国古典・仏典の受容過程で生じた特殊な翻訳文体であるが、単に翻訳にとどまらず、日本の学術・思想を支える基本的な文体として近代にまで受け継がれた。この漢文訓読文体の形成・発展過程を具体的資料に基づいて明らかにしようとするのが本研究である。この目的を遂行するために、1) 語誌的アプローチ、2) 構文論的アプローチ、3) 書誌学的アプローチ、4) 研究資料の整理・公開、の4本の柱を立てて活動していく。即ち、次のような問いに答えようとするのである。

- 1) 語誌的アプローチ：漢文訓読文に特有の語彙は、どのように形成されたか。また、どのような経路で現代にまで受け継がれ、また受け継がれなかったか。
- 2) 構文論的アプローチ：漢文訓読文に特徴的な構文にどのようなものがあるか。それは、どのように形成されたか。中国語の干渉はどのように現れているか。

その構文は、日本語の文法にどのような影響を与えたか。

3) 書誌学的アプローチ：漢文訓読文はどのように作成され、またどのように流通・受容されたか。その様態は、時代によってどのように変化したか。

4) 研究資料の整理・公開：漢文訓読文に関する研究成果を、紙媒体および電子媒体で効率よく公開するために、どのような方策が有効か。

以下、各アプローチについて、第1期に達成された点と第2期において達成しようとする点について述べる。

2 本研究の成果と展望

2.1 語誌的アプローチ

従来の文体論研究では、語彙や文末表現等の文体指標の比較検討、計量的研究、さらに単なる印象批評等の方法が中心であった。これらの方法によって従来もかなりの成果が挙げられており、有効な方法であることには間違いはないが、外形的、表面的な比較に留まり、文体間の有機的なつながりや、その歴史的な変遷の過程を実証的に検証するにはなお不十分な面もあった。そこで、それぞれの文体で使用される個々の語の意味・用法に深く踏み込むことで、より具体的かつ細密な文体間の交渉を検証しようとしたのが1の語誌的アプローチである。第1期に、この領域では、存在を表す動詞「ヲリ」と三人称代名詞「カレ」を対象として、研究が進められた。特に「ヲリ」については、平安期における和文と漢文訓読文との間において、「ヲリ」の表現価値に鋭い対立の存在することが明らかになった。第2期ではこの成果を踏まえ、中世以降における「ヲリ」の意味と分布を精査し、そのことによって漢文訓読文の文体史上の流れを具体的に指摘していく。

2.2 構文論的アプローチ

従来の文体史的研究でもっとも欠けていたのは、この構文論的観点であろう。本研究では、特に疑問文の文型に焦点を当て、文型、係り助詞の選択と付加位置等の観点から、和文と漢文訓読文の相違を明らかにし、併せて時代による変遷を検証する。このことから、漢文訓読文らしい構文とはどのような特徴をもった構文であるのか、それは原語である中国語の文法とどのように関わっているのか、また漢文訓読文の文法が日本語の文法にどのような影響を与えたか、といった点から整理を進めていく。

2.3 書誌的アプローチ

本研究では、漢文の訓読が実践され、継承される場を文献資料に基づいて具体的に明らかにしていくことを目的の一つとしている。その方法として、第1期で

は、高山寺所蔵典籍の調査を行ってきた。すなわち、以下のような文献である。

1. 方便智院聖教目録（重文第1部193号 [9]）
2. 恵果和尚之碑文（重文第1部211号）
3. 観智記（重文第2部41号 [1 - 3]）

今期は、新たに大阪府河内長野市にある天野山金剛寺の経蔵をも調査対象に加える。さしあたって、平安末期写本の「観無量寿経」（観経）の調査・読解を進行中である。同教は浄土宗、浄土真宗の根本経典として鎌倉時代以降重視されたが、本資料はそれ以前の観経の読みを知る上できわめて重要な資料となる。

また今期には、朝倉尚氏を研究分担者に加え、「禅林聯句」を中心とする室町時代の五山文学をも視野に入れて研究を展開する予定である。

2.4 研究資料の整理・公開

本研究において既に作成・公開しているデータベースは以下の通りである。

1. 「方便智院聖教目録」書名データベース
 2. 「日本語指示詞研究文献一覧」データベース
上記データベースは <http://bun153.let.osaka-u.ac.jp/kokugogaku/kinsui/welcomej.htm> から利用可能である。
- 上記以外に、現在準備中のデータベースは以下の通りである。

1. 漢文訓読文・訓点資料関係論文目録
2. 「明六雑誌」本文データベース
3. 高山寺本・東京大学国語研究室本「恵果和尚（上）之碑文」対照データベース
4. 「観智記」本文データベース

B02-64・公募研究

大唐六典の受容と制度通の撰述

研究代表者 礪波 護
大谷大学文学部 教授

中国古典、とりわけ制度典籍の日本における受容と伝承の歴史において、近衛家熙（1667～1736年）が、京都の東の鴨川畔の別邸で、自ら精力を傾注して考訂し、その死去に至るまで側近の侍臣と検討を続け、没後三周忌の前日に漸く上梓された、いわゆる 近衛本『大唐六典』30巻と、同じ時期に西の堀川畔で、伊藤東涯（1670～1736年）が撰述した『制度通』13巻の両書こそは、京都が世界に誇りうる業績である。

本研究は、平成11年度と12年度の研究題目「近衛家
熙考訂本『大唐六典』の研究」を継続して京都大学附
属図書館新収の家熙自筆『大唐六典』稿本を吟味する
とともに、天理図書館の古義堂文庫に所蔵される東涯
自筆の『制度通』を精査し、中国制度典籍の受容の特
色を明らかにしたい。

唐代はもちろん、唐以前における中国の行政機構と
官僚制を考察するに当たって最も有用な書である『大
唐六典』は、玄宗の御撰で勅を奉じて李林甫らが注を
書いたもので、開元年間の官職を基準に、それぞれの
職掌に関する律令格式と勅などの諸規定を分類したも
のである。

摂政と太政大臣を歴任した近衛家熙が鴨川畔の別邸
で二十数年に亘って自ら校勘に従事した際、底本とし
たのは、かの新井白石(1657~1725年)から贈られた
明・嘉靖本の白石自筆の写本に家熙が考訂し墨色を異
にして書き加えつづけた家熙の稿本が、数年前に偶然
発見され、私自身が確認した。

この家熙考訂本『大唐六典』、いわゆる近衛本『大
唐六典』は、最良のテキストと目されてきたにも拘わ
らず、その成立過程についての考察は等閑に付されて
きた。京都大学附属図書館で発見するという絶好の機
会に恵まれたので、この稿本を精査して、いわゆる近
衛本『大唐六典』の成立過程を綿密に跡付けるのを
目的とする研究を開始したいと考え、二年前に公募に
応じたのであった。新発見の稿本を手にとって進める
研究だったので、期待に応えうる成果をあげつつある
と確信している。

『大唐六典』全30巻が当の中国でどのように行用さ
れたのかについては、内藤乾吉の「唐六典の行用につ
いて」があったが、1983年に北京の中華書局が、一帙
四冊からなる、原寸大の複製本を出版した際に、簡に
して要を得た説明を施した。また、家熙考訂本に対し
て句読・訓点および書き入れをした、広池千九郎(1866
~1938年)の成果は、内田智雄による補訂をとまなっ
て、1973年に広池学園事業部から出版され(広池本
と呼ばれている)、その影印本が近年になって西安の
三秦出版社から出された。ところが、句読や書き入れ
に妥当でない箇所が散見される。そこで、京都大学の
文学部および人文科学研究所に所蔵される政書などを
参照しつつ、広池本における疑問点の一つずつ吟味し
ようとしたのである。

近衛本『大唐六典』の成立過程を跡づける地味な
作業をつづけ、この二年間で、巻1から巻5までと巻
30を重点的に調査し、不分明であった多くの疑問が氷
解してきた。幸い今回も引き続き公募研究が採択され

たので、巻6から巻9までを重点的に調査する。

一方、伊藤東涯撰の『制度通』13巻は、中国歴代の
制度の沿革と、対応する日本の制度との関係を項目別
に述べた書物である。内容は、天文、暦法、地理、官
制、官吏任用、税役制、度量衡、礼楽、律令格式、兵
制、法制といった制度全般にわたり、中国の古代から
明代にいたる間の変遷を簡明に跡付けるとともに、そ
れぞれの条に、本朝之制の名目を唐の記事に続け
て設け、唐制と比較しやすくして、今なお最も信
頼しうる制度史入門書とされている。五十数年前に、
吉川幸次郎校訂本の『制度通』上下巻が岩波文庫に収
められているが、科学研究費を与えられた機会に、私
なりの簡単な注釈を施し、索引を付した書物を読書界
に提供する所存である。

ちなみに、同時期の京都の堀川畔で古義堂を継いで
いた、儒学者の東涯は、父伊藤仁斎の関心の外にあっ
た語学や博物学に造詣を傾けたばかりか、唐代の行政
機構や官職にも関心を抱いて、本書のほか『唐官鈔』
3巻をも著したが、町人身分で終始したためか、ごく
近所で生活していながら、摂政・太政大臣であった、
近衛家熙と直接に交渉をもった気配はなかった。

B03「近現代社会と古典」

B03-65・計画研究

『シャーナーメ』の伝承とイラン人意識の形成

研究代表者 羽田 正
東京大学東洋文化研究所 教授

研究分担者 榎屋 友子
東京大学東洋文化研究所 助教授

佐々木 あや乃
東京外国語大学 助手

研究目的

(1) 『シャーナーメ』に見られる古典的な「イラン
人意識」と近代的なイラン国民意識の関係の解明

『シャーナーメ』に見られる古典的な「イラン人意
識」が、近代西欧に源を発する「国民意識」とどのよ
うな関係にあるかを考察する。『シャーナーメ』にお
けるイラン人意識とはいかなるもので、それは歴史の
中でどのように表象されてきたものなのかを明らかに
する。